

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水域

NO. 22 スリランカの仕事師



アマダーラプラ水道の

Mr. ウイタナギ



キャンディ圏水道の

Mr. ガミニ



ピンナワラの象使い

スリランカ全図を見ると、形がミジンコに似ているなあと思ってしまうのだが、少し南部の東西にぷっくりと膨れたあたりの真ん中に古都キャンディがあり、その西、車で1時間ほどのところに、「ピンナワラ象の孤児院」がある。母象とはぐれたり死別した子象を保護する目的で1975年に政府が設立した施設とのことである。1日2回の水浴びが観光の目玉になっている。動物園に出かけることでもなければ、象を見ることなどあり得ないし、しかも80頭余りの象が柵もない川で水浴びする様子を真近かで見ると、物見遊山とはこういうことだと、大いに満足させる施設であった。

象の群れを制しているのは僅か数人の象使いで、1人は川の出入り口の坂に、1人は水道の放水係り、他は離れた場所で流れの中の岩に立ち、象が決められた範囲を逸脱しないようにしている。その中で、見物人と象の群れの間には1人の老人が立っており、象の側でなく見物客に向かって身じろぎすらしなくて、じっと見つめている。小柄で華奢な褐色の体は、針金のような、と例えたくなるほど細い。その体で背中を向けたまま象を制御している。肩には2m以上はあろうかと思われる棒を担いでおり、その先端は鋭く尖った槍状のものと鉤状の物—おそらく固い金属—が組み合わされている。恐ろし気な形状だが、それで威嚇している様子はなかった。しかし、象が見物人の方に少しでも近づこうとすると、その気配を察知して振り向くと、象は慌てたように巨体を揺すって川の方へ戻っていく。象の慌てた様子がユーモラスでもある。その有様は実にプロフェッショナル然としており、彫りの深い顔立ちもあって、その世界を知り尽くした、あるいは道を究めたと思わせる（勝手に勘違いする？）雰囲気横溢していた。

2人目。キャンディ圏水道事業チーフエンジニアのMr. PHサラス・ガミニ（読み方は正しくないだろうが、敢えて表音で）。基幹のカツガスタタ浄水場で訪問団（日本技術士会

上下水道部会) を迎えてくれたガミニさんは、懇切丁寧にキャンディ圏の水道について説明してくれた。同氏はまるまるとした体型で、声が太く大きく、巨体を揺すりスローなアジアン英語で、その声は部屋に響きわたった。何よりも、愛嬌があるのだ。聞けば地元でも有名人で、水道のPRでTVにも出演している、タレントということである。まさに「スリランカの水道人」といった人だった。

3人目。その人はキャンディ市よりさらに北に位置するアヌダーラプラ市のカラウエラ浄水場にいた。このリーダー(エリア・エンジニア)は京都大学に留学経験があるようで、挨拶では真っ先に「原田茂樹」(現・宮城大学教授)の名前が出た。建物の正面には「ようこそ」のひらがなで歓迎の紙が貼られ、日の丸が掲げられており、エアレータの白い泡立ちと一体となって、訪問団を大いに喜ばせた。この浄水場は見並団長の事前調査にも関わらず、ネット上に一切、情報がなかったが、「グーグルには間違いなく配水用洗浄用の高架タンクが写っている」という話だった。説明によると、計画・設計から施工まで、すべてスリランカ独自で建設したものだ。リーダーは1970年代前半頃の生まれということで若く、事業の説明から施設の案内まで仕事への愛着とプライドを感じさせるものだった。

4人目。上記ピンナワラ象の孤児院は、予定を繰り上げて訪問したもので、翌日、訪問団は空いた時間に宝石店に案内された。「これが狙いだっただか」と、我々はガイドの目論見を嗤った。「このメンバーで宝石を買える者などいる訳がない、見れば分かりそうなものだが、まあ、商売だからね」と、原石採掘から宝石製造までの映像を眺め、大きな原石に感心して触ってみたり冷やかして回った。

ところが、である。なんとメンバーの1人が高額な宝石を購入したのである。

「正気か」「大丈夫か」というメンバーの驚きの声に、“主人公”は、「ま、色々あってね」と多くを語ろうとしない。

4人目はグループの中にいたのである。